琉球大学学術リポジトリ

尖閣列島の海鳥について(農学科)

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農学部
	公開日: 2008-02-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 高良, 鉄夫, Takara, Tetsuo
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/4536

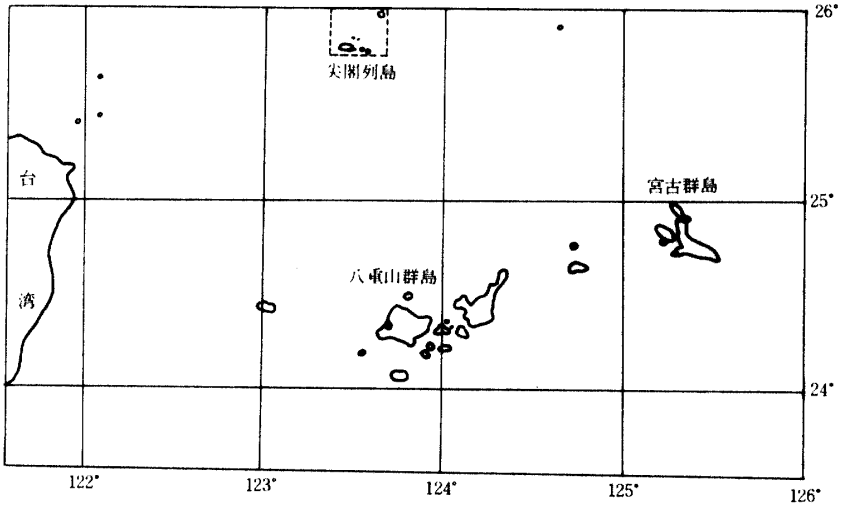
尖閣列島の海鳥について

高　良　鉄　夫*

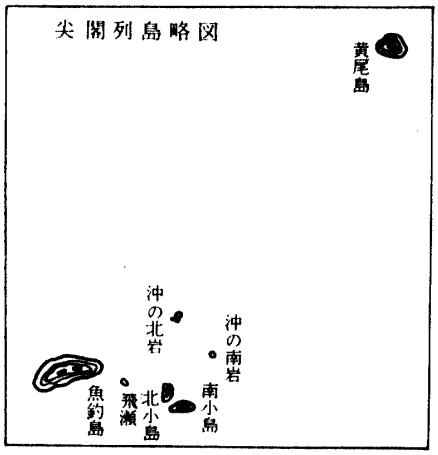
Tetsuo TAKARA: Sea-fowls of the Senkaku Islands, Ryukyus.

はしがき

尖閣列島は東支那海にあって，生物地理学ならびに海洋気象学上きわめて重要なところである。行政管轄は沖縄，石垣市に属しているが，交通不便なへき遠の洋上に位置し，しかも無人島である。そのため同列島の生物学的調査研究は，いまだ充分に行なわれていない。



第1図　尖閣列島の位置
Fig. 1. Location of the Senkaku Islands.



第2図　尖閣列島の略図
Fig. 2. Map of the Senkaku Islands.

動物相の研究ならびに動物関係資源調査のため，本列島を訪れた人はいたって少なく，筆者の知る範囲では，石沢兵吾（1885），宮島幹之助および黒岩恒（1900），恒藤規隆（1910），正木任，小林純および高橋尚之（1941），高良鉄夫（1954）である。

沖縄県属石沢は1885年10月郵船会社の出雲丸で同列島を調査し，魚釣島におけるアホウドリの群集状況などについて報告された。宮島および黒岩は1900年5月大阪商船会社の永康丸（古賀の特別用船）に便乗し，宮島は黄尾島にとどまって調査され，主として同島の動物とくに海鳥の生息状況について報告，黒岩は同列島を巡航し，主として同列島の地形，地

* 琉球大学農学部農学科

質，生物について調査報告された。恒藤は同列島を調査し，とくに海鳥の群集状況と，それに関連する資源について報告されている。石垣島測候所の正木は，1939年5月農林省農事試験場の小林および高橋の資源調査隊と同行，沖縄県立水産学校の海邦丸で同列島を巡航し，動物の調査を行なった。高良は1952年3月～4月，琉球林業試験場の多和田真淳らとともに，また1953年7月～8月，琉球大学宮城元助らとともに，生物および資源の調査を行ない，同列島の動物相について報告した。

筆者はその後，第4次および第5次調査を行なった。第4次調査の一部は，天然記念物保護の立場から，すでに公表したものもあるが，ここに第4次および第5次調査の結果をまとめて詳述する。今後の同列島の海鳥研究の一助になれば幸いである。

調査方法の概要

1. 日程および行動の概要

第4次調査

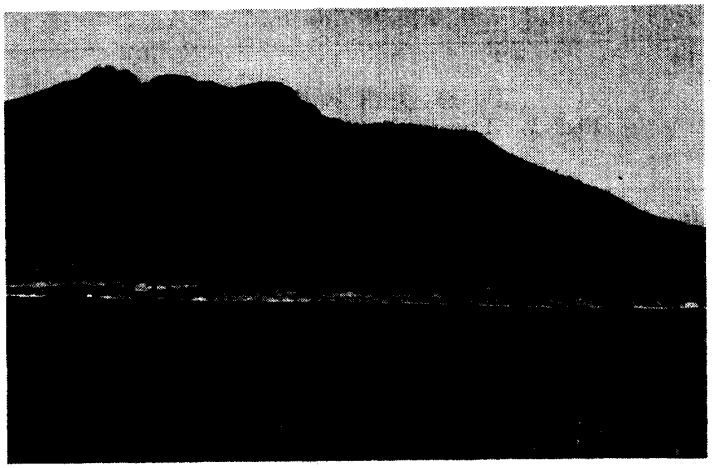
1) 海鳥（とくにアホウドリ）その他の調査。

2) 1963年5月15日～5月21日。

3) 5月15日那覇発，5月16日赤尾島（ただし上陸せず，双眼鏡によって観察），同日南小島上陸（島内野宿），5月17日北小島および魚釣島上陸，5月18日魚釣島～石垣島，5月19日石垣島着，5月20日石垣発，5月21日那覇着。

4) 琉球水産研究所々属，図南丸（159トン）に便乗，石垣島～魚釣島間所要時間およそ11時間。

5) 琉球大学農学部教授，高良鉄夫，海鳥調査。琉球大学文理学部助教授，新納義馬，植物生態。琉球気象庁海洋係長，伊志嶺安進，海洋気象。報導関係，琉球新報社，田積友一郎。沖縄タイムス社，粟国安夫。日本テレビ沖縄駐在員，森口豁。琉球放送テレビ報導課，赤嶺徳信。沖縄科学教材社，照屋林松。



第3図 魚釣島の西南部
Fig. 3. Southwestern part of Uotsuri Island.

第5次調査

1) 地下資源（とくに油田）の予備調査その他の調査。

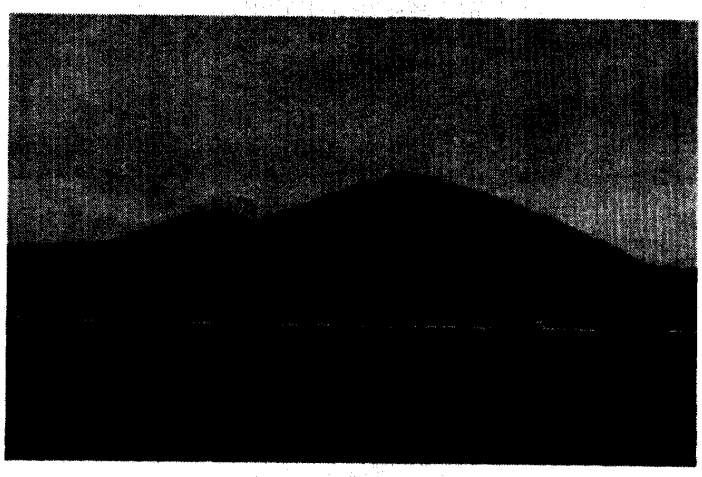
2) 1968年7月6日～7月10日。

3) 7月6日那覇発（航空便）石垣島へ，7月7日石垣島発，7月8日魚釣島上陸，7月9日南小島および北小島上陸，同日黄尾島（ただし上陸せず，双眼鏡で観察）経由石垣島へ，7月10日石垣島着，

同日那覇へ。

4) 琉球水産研究所々属，図南丸（159 トン），黄尾島～石垣島間所要時間およそ 12 時間半。

5) 沖縄懇談会専門委員（東京），高岡大輔。琉球大学農学部教授，高良鉄夫（主として海鳥の調査）。琉球大学理工学部教授，兼島清。琉球気象庁海洋係長，伊志嶺安進。茨城大学助教授（琉球大学招へい講師），北岡甲子郎。琉球大学経済研究所研究員，真栄城守定。琉球政府総務局渉外課長，新城鉄太郎。同通産局工業課，大城盛俊。八重山地方庁水産係長，田代浩。八重山気象台観測係長，正木譲。石垣市役所水産係長，田盛恒武。八重山警察署巡査，平良繁治。同巡査，伊良波幸勇。



第4図 黄尾島の西南部
Fig. 4. Southwestern part of Kôbi Island.

2. 海鳥の数の推定

本文に述べる海鳥の数の推定は，次の方法によった。

1) カツオドリの推定は，任意に数個所を選定し，およそ 10 平方 m あたりの巣および巣の中の幼鳥，成鳥の実数を調査して平均値を求め，生息地域の推測面積で換算したものである。

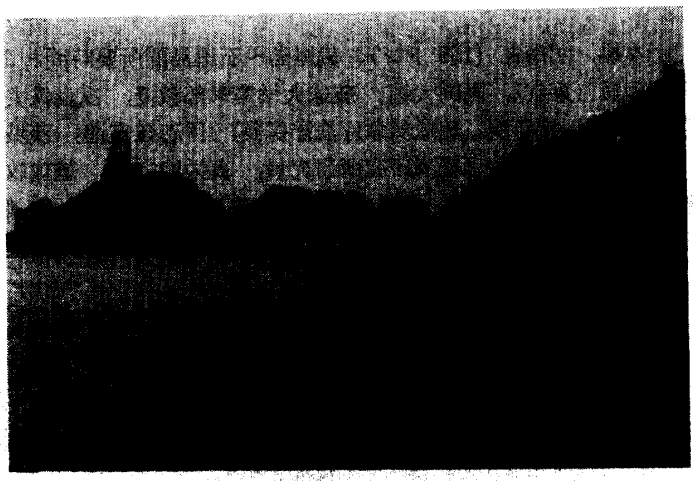
2) セグロアジサシは巣を作らないので，地上における推定数と空中における推定数を合算した。地上における推定は，セグロアジサシがおちついたころを見計らい，任意に数個所を選定し，10 平方 m あたりの実数を調査して平均値を求め，生息地域の推測面積で換算した。空中における数はその分散状況を考慮して，地上における数のおよそ 20% と推定した。

海鳥の生息状況

尖閣列島における海鳥の生息状況は，各島によって，おもむきを異にする。ここに各島別に，その実態について述べる。

魚釣島 魚釣島は面積 4.31 平方 km，標高 369m，ビロウその他の樹木が茂っている。黒岩 (1900) によると，同島の西南岸の砂地はアホウドリ *Diomedea albatrus*，クロアシアホウドリ *D. nigripes* の生息地になっているが，現在は同地域はもちろん，その他の地域でもアホウドリ，クロアシアホウドリについての資料は全く得られない。3 月～5 月にかけて，時たまオオミズナギドリ *Puffinus leucomelas* が南小島から飛来するほかは，海鳥はほとんど見受けられない。

黄尾島 黄尾島は面積 1.08 平方 km，標高 118m，樹木と雑草でおおわれている。宮島 (1900) は同島に生息する海鳥としてアホウドリ，クロアシアホウドリ，オオミズナギドリ，クロウミツバメの一種 *Bulweria bulweri*，カツオドリ *Sula sula* を記録し，セグロアジサシ *Sterna fuliginosa*，ク



第5図 南小島の北西部
Fig. 5. Northwestern part of Minami-Kojima Island.

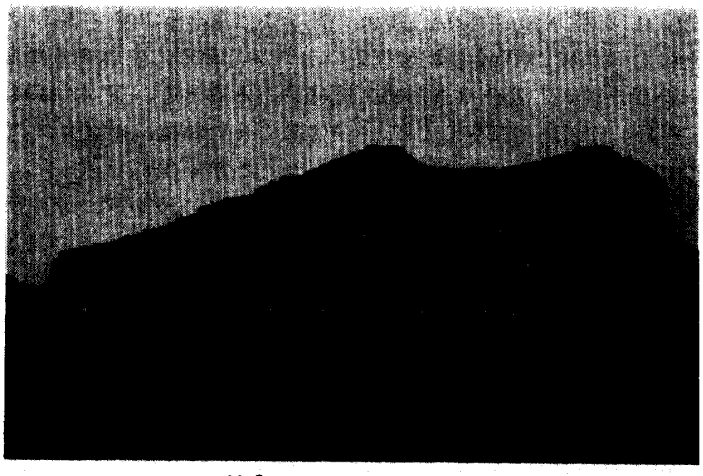
ロアジサシ *Anous stolidus* は見受けられないと報告されているが，正木 (1941) は当時の海鳥の主なものとしてリュウキュウカツオドリ，クロアジサシ，ミズナギドリをあげ，そのなかでリュウキュウカツオドリの多いことが報告されている。

筆者は1968年7月上旬，はじめて同島を訪れた。しかしながら永久危険地区（米軍演習場）に指定されているので，上陸はできなかった。従って同島における海鳥の詳細については知る由もないが，海上 200～300 m から双眼鏡で島内を観察した結果，海岸線に沿ってカツオドリ *Sula leucogaster plotus* が目撃された。とくに北岸と南東岸に多く，岩上や岩壁に生息している。また北岸と南東沿岸の隣接草地にも多少見受けられるが，いずれも成鳥が多く，ひなは少ない。その数はおよそ3万羽と推定された。島内斜面の雑草地には，多分にオオミズナギドリ，アナドリ *Bulweria bulweri* が生息しているであろうが，観察不充分で，その生息状況は明らかでない。宮島 (1900) によると，同島におけるオオミズナギドリは，2月ころから飛来しはじめ，9月ころに島を去るといわれる。古くはアホウドリ，クロアシアホウドリのなわばりであった斜面は，雑草が茂っており，両種についての資料は全く得られない。クロアジサシ *A. stolidus pileatus* が点在的に見受けられるが，岩はだや光線の関係で，その数の推定は困難である。

南小島 南小島は面積 0.46 平方 km，標高 149m，低平地の一部に少数のかん木がはえており，斜面には雑草が茂っている。宮島 (1900) によると，オオミズナギドリ，クロウミツバメは生息せずと報告されているが，事実はオオミズナギドリが生息している。筆者が 1952 年4月中旬および 1953 年8月上旬に行なった現地調査の結果，一部の低平地を除くほかは，全島ほとんどカツオドリでおおわれていた。その数はおよそ 50 万羽と推定され，全海鳥のおよそ 80% にあたる。これにつぐものは，セグロアジサシ *S. fuscata nubilosa* でおよそ 15%，クロアジサシ 3%，オオミズナギドリ 2% である。そのほかにアオツラカツオドリ *Sula dactylatra personata* が見受けられたが，その数は非常に少ない。

当時カツオドリは主として，岩山の上部および側面，傾斜地などに，セグロアジサシは島の中央部の低平地に，クロアジサシは岩壁に，オオミズナギドリは南部の斜面に，およそ 1 m の横穴を堀って住み分けていた。1963 年5月中旬の調査では，カツオドリの数は，およそ 35 万羽に減少し，その生息場所も岩山の上部，急傾斜地に縮減され，1968 年7月上旬の調査では，さらに激減し，岩山の上部や急傾斜でも，人間がよじ登れる場所には，全く見受けられず，岩山の頂部と岩壁に生息しているだけで，その数はわずかに1万羽と推定された。

セグロアジサシもカツオドリと同じように，年を経るにつれて減少し，1963 年5月中旬の調査では



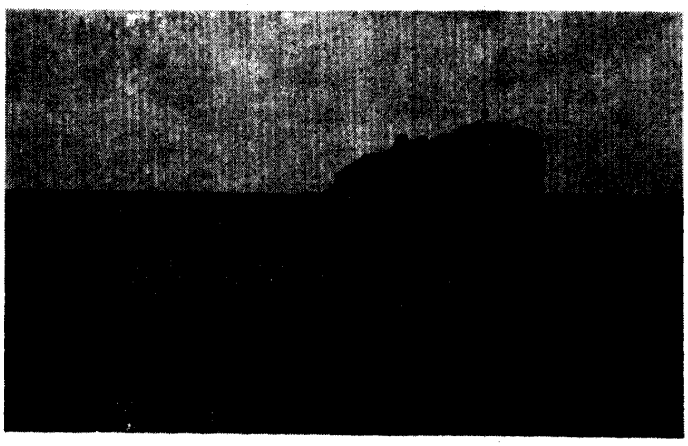
第6図 北小島の東南部
Fig. 6. Southeastern part of Kita-Kojima Island.

半減し，1968年7月上旬の調査では，前記の低平地には全く見受けられない。クロアジサシもその数を減じ，岩壁とその近くの海中にある岩礁に見受けられるだけである。オオミズナギドリの生息地は第4次，第5次ともに再調査できなかったが，その数もおそらく半減しているものと思われる。

南小島におけるカツオドリの生態の概要について述べると，産卵数は1〜2個で，ごくまれに3個入っている巣もある。産卵期は相当個体差があり，1952年4月中旬には，抱卵中のものが多く，一部ふ化していたが，1953年8月上旬の調査では，抱卵中のものは，いたって少なく，中ひな以上のものが多かった。また1963年5月中旬の調査では，卵のない巣はおよそ10%，抱卵中のもの30%，すでにふ化していたもの60%であった。幼鳥の発育程度もまちまちで，全身綿毛に包まれたもの，ようやく飛べるものもあった。このような状況からみると，尖閣列島におけるカツオドリの繁殖は3月〜4月が最盛期と思われる。

日中の抱卵はメス，オス交代で行ない，ひなを抱いている親鳥は，人が接近しても容易に巣を離れない。1mほど接近すると，口をパク，パク鳴らし，威かく態勢をとるが，危機を感ずると，その場に胃中の食物を吐き出し身を軽くして飛び去る。その食物は，主としてトビウオ，イカなどである。

カツオドリの巣は粗雑で，岩のくぼみ，あるいは腐植土の上に雑草を用いて作られる。巣材の主な植物は，ハマボッス，メヒシバ，ギシギシ，ツルソバ，ツルナなどである。



第7図 北東から見た赤尾島
Fig. 7. Sekibi Island view from northeast.

北小島 北小島は面積 0.30 平方 km，標高 129 m，樹木は全くみられず，島の上部平坦地に雑草がはえている。南小島とはわずかに 200 m しか離れていないが，そこに生息する海鳥の分布状況は，南小島とは全くおもむきを異にする。これはきわめて興味のあることで，正木 (1941) の報告にもみられる。筆者が 1953 年 8 月 1 日同島を調査した際，最も数の多い種は，セグロアジサシで，全海鳥のおよそ90%を占め，これにつぐ種はクロアジサシ 7%，カツオドリ 3% であった。

当時セグロアジサシは，島の中央部の緩傾斜面および平坦地に，クロアジサシは沿岸の岩上および岩壁に，カツオドリは主として西岸および南岸の岩上に住み分けていた。そのほかに東南岸には，少数のオオアジサシ *Thalasseus bergii cristatus* がみられた。

黒岩 (1900) は前記海鳥のほかに，アカオネッタイチョウについてふれ，正木 (1941) は数多くのクロアシアホウドリが生息していたことを報告しているが，これらはいずれも確認できなかった。

北小島におけるセグロアジサシの群集は，実にみごとなもので，1953 年 8 月 1 日の調査では，地面は親鳥とひなでおおわれ，地上と上空で騒ぐ鳴き声は，わずか 10m，離れても話が通じないほどであった。また上空を飛んでいるセグロアジサシのために，天日はさえぎられ，糞の雨が降る。真夏になると鳥糞の臭気がはげしく鼻をつくので，1 時間以上風下にとどまることは容易でない。このような景観はおそらく日本近隣には，他に類をみないであろう。正木 (1941) の報告によると，10～30 cm おきに産卵されていたといい，また当時のセグロアジサシの数は何億と評言されている。筆者が 1963 年 5 月中旬同島を訪れた際は，およそ 30 cm おきに産卵されている所もあったが，これを正木の報告に比べると，その数は著しく減ったことになる。事実北小島のセグロアジサシは，年をおうてひどく減少している。すなわち 1953 年 8 月 1 日の調査では，およそ 100 万羽と推定されたが，1963 年 5 月中旬の調査では，およそ 50 万羽に減じ，さらに 1968 年 7 月上旬には，およそ 20 万羽に激減している。

第8図 カツオドリ (田積氏提供)
Fig. 8. *Sula leucogaster plotus* (Forster)

本種は巣を作ることなく，卵は腐植土あるいは岩上に直接産下され，産卵数は 1 個である。ひなを抱いている親鳥のなかには，勇敢なものがおり，人の顔をめがけて突入し，あるいは後方から頭上をかすめて飛ぶものもいる。人が接近すると，ひなは右往左往逃げ惑う。そのため無数のひなが入り乱れてしまうが，興味あることは，その群れのなかから親鳥が自分の子を選り分けて食物を与えることである。雑草のなかに生息しているセグロアジサシは，人が急に接近するとすぐに飛び立つことがで

きず捕獲されやすい。

赤尾島 赤尾島は面積 0.15 平方 km，標高 84m，島内には樹木は全くなく，わずかに雑草がはえている。筆者は 1963 年 5 月 16 日，はじめて同島を訪れたが，天候が悪く上陸できなかった。100～150m 離れた海上から双眼鏡で島内を観察したが，海鳥の主なものはセグロアジサシおよそ 60%，カツオドリ 20%，クロアジサシ 20% で，これらの総数はおよそ 1 万羽と推定された。

セグロアジサシは島のほぼ中央部を占め，カツオドリは周辺の断崖の上部に，クロアジサシは主として断崖の下部に住み分けていた。

ここで付言したいことは，海鳥類相互のなわばり争いである。住み分けの境界線には多少の緩衝地帯がみられるが，その程度は地形によって異なっているように思われる。親鳥が他種のなわばりに入り込むことは，ほとんどないが，幼鳥が他種のなわばりに迷い込むと，その幼鳥は他種の親鳥によって，つつき殺されてしまう。筆者は北小島で，次の事実を目撃した。すなわち，セグロアジサシのなわばり内に入り込んだカツオドリのひなが，5 羽のセグロアジサシにつつかれて重傷をおい，また同じくセグロアジサシのなわばり内に迷り込んできた伝書鳩が，6 羽のセグロアジサシにつつかれていた。住み分けの緩衝地帯にセグロアジサシの幼鳥の死体があり，また南小島では，カツオドリのなわばり内に，オオミズナギドリの惨死体を見受けたが，これらはおそらく激しいなわばり争いの結果によるものであろう。

筆者の調査は，第 1 次～5 次を通して，4 月中旬から 8 月上旬にかけて行なわれたものであり，8 月中旬から翌年 3 月下旬にかけての現地調査は行なわれていないので，これらの海鳥の季節的変動については，明確な資料は得られていない。恒藤 (1910) によると，カツオドリは 2 月上旬より渡来し，12 月中に飛び去り，オオミズナギドリは 2 月中旬より渡来し，10 月～11 月下旬にかけてことごとく島を去るといれわている。アホウドリは，宮島 (1900) によると 10 月ころ渡来し，翌年 4 月ころに島を去るという。

筆者は前に述べたように数次にわたって同列島を調査したが，いまだかってアホウドリ，クロアシアホウドリを目撃したことがない。それでは筆者が目撃できなかったのは，調査の時期がアホウドリ

第 9 図 北小島のセグロアジサシ (1963)
Fig. 9. *Sterna fuscata nubilosa* in the Kita-Kojima Island.

の渡来季節から多少ずれていたためであろうか。だがしかし宮島は5月10日に黄尾島でアホウドリを確認し，また黒岩 (1900) も同じ時期に魚釣島においてクロアシアホウドリの生息を確認している。さらに正木 (1941) は5月27日，北小島に多くのクロアシアホウドリがいたことを報告している。このような観点から筆者の調査は必ずしも時期を失したとは言えない。もしも尖閣列島のどこかにアホウドリ，クロアシアホウドリが生息していたものなら，当然目撃できたはずである。近年筆者のほかに，同列島においてこれら2種の海鳥を確認した情報もないので，尖閣列島から完全に跡を絶ってしまったと考えるのが妥当であろう。

奇異な分布の起因

前述のように海鳥の種類，分布の様相は，島々によっておもむきを異にするが，それは何に起因するのであろうか。

宮島 (1900) は当時の海鳥の分布状況の相異から，その起因は海鳥の生息地である島上の状態も，その原因の一つであろうが，食物となるべき生物の相異が最も有力な原因であると述べている。

島々の相互の位置がかけ離れている場合は，その食物が原因の一つになることは考えられるが，各島相互の距離，近海における海流の状況，魚獲物の種類などから考察すると，食物は有力な原因とは思われない。ことにわずか200mしか離れていない南小島と北小島の場合はそうである。

カツオドリ，オオミズナギドリ，セグロアジサシの形態，習性とくに飛び立つ時と着陸時の動作，営巣，産卵の状況などを綿密に観察し，且それらの生息環境を子細に吟味すると，分布の相異は，むしろ島々の地質，地形および地物に関連しているように思われる。

南小島の西南部および北部にカツオドリが多く分布することは，これらの地域の地形や地質などが，カツオドリの形態や習性上から，その生息を許容する生態的要因を備えており，同島の中部の低平地は，カツオドリの生息を許容する生態的要因に欠けているからである。同じように北小島の中部および南小島の中部の低平地に，セグロアジサシが分布することは，同地域がセグロアジサシの生息を許容する生態的要因を備えているからである。

古い時代と現在の分布状況を比較すると，その種類や個体数は著しく異なっているが，それは後に述べる野生ネコの食害と過去における乱獲などの人為的侵害に起因するものと考えられる。

有害動物と海鳥の被害

尖閣列島の陸産動物は種類が少なく，とくに背椎動物は海鳥を除いては，いたって貧弱である。同列島に産する動物のなかで，海鳥を食害する動物として，ネズミ，野生化したネコ，大形のヘビをあげることができる。これらの生息状況と害相の概要について述べる。

クマネズミ *Rattus rattus* Linné

尖閣列島にはネズミが多い。正木は魚釣島に野ネズミの多いことを報告し，高良はエジプトネズミ（本文ではクマネズミに訂正する）の多いことを報告している。正木が野ネズミと称しているのは，おそらくクマネズミをさしているのであろう。

南小島にクマネズミが生息していることは，すでに知られているが，北小島にクマネズミが生息していることは，1963年5月17日日中目撃されたことによって，これを確認した。

魚釣島におけるネズミの発生消長は，人間の移住と密接な関係のあることは，高良によって報告されているが，南北両小島のネズミの発生消長と人間の移住と関連があるか，どうかは判断する資料がない。両小島の地理に明るい金城某によると，1900年ころネズミが激増し，その数年後にシュウダが増殖したといい，北小島の洞くつでは，シュウダが1個所に集団越冬したため，下部のものは圧死され，その死体が累積していたとのことである。このような観点から南北両小島におけるネズミの発生

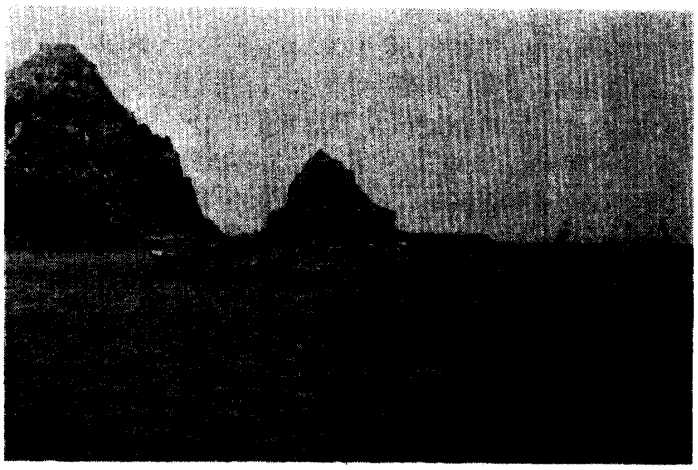
第 10 図 セグロアジサシ
Fig. 10. *Sterna fuscata nubilosa* Sparrman.

消長は，むしろネズミの天敵であるシュウダと関連があるものと考えられる。すなわちシュウダが減ると，ネズミは豊富な卵やひなを捕食して増殖し，これをおってシュウダがネズミを捕食してふえ，シュウダが激増するとネズミは減少し，ついでシュウダは増殖の極に達すると，集団越冬のため圧死されて減少する。

野 生 ネ コ

黄尾島の野生ネコは，1895 年ころ船内に飼ってあった 1 対のネコが係船中に逃げ，これが増殖したものといわれる。野生化したネコが激増してアホウドリの生存にすくなからぬ悪影響をおよぼしたことは，宮島 (1900)，岩崎 (1918) によって報告されている。黄尾島におけるネコがどれほど現存しているか，明らかでないが，爆撃演習が行なわれるごとに，海鳥とともに殺傷されているであろうことは，推察するに難くない。

野生ネコは魚釣島にも現存する。古賀がカツオ業を営んでいた当時，ネズミの発生が多いので，これを駆除するために導入されたようである（年代未詳)。日中は容易に見られないが，夜間になると宿営地に出没する。筆者は 1950 年 3 月，はじめて同島を訪れたが，ほとんど毎晩ネコの鳴き声を聞いている。当時同島にはカツオ業の仮工場があり，そこに出没したネコの数は，毎晩数匹ないし十数匹と推定された。また 1963 年 4 月 17 日山林内でカラスバト *Columba janthina* subsp. リュウキュ



第 11 図 北小島の北東部
Fig. 11. Northeastern part of Kita-Kojima Island.

ウアカショウビン *Halcyon coromanda bangsi* の残がいを見受けたが，それはおそらくネコによる食害であろう。

シュウダ *Elaphe carinata* Günther

尖閣列島のうち，魚釣島，南小島および北小島にはシュウダを産する。黄尾島，赤尾島におけるシュウダの生息状況は調査できなかったが，宮島によると「黄尾島には生息するを知らず」との報告があり，赤尾島は，その環境条件からみて，生息していないものと判断される。黒岩 (1909) が報告したリュウキュウアオダイショウ *Elaphe schmackeri*，正木が報告したヤエヤマニシキヘビ（学名未記）は，実はいずれもシュウダであって，本列島にはシュウダ以外のヘビは産しない。高良 (1954) は南小島にシュウダの多いことを報告したが，その後の調査で北小島にも多数生息していることを確認した。

本種は性温順な無毒ヘビで，体長 2.5m に達するものがあり，ネズミ，海鳥のひなを捕食するが，とくにネズミを好む。南小島および北小島には，食餌動物が豊富で，しかもヘビの天敵は全く生息していないので，まさにシュウダの楽園である。

以上述べた有害動物のうち，その害相からみて，海鳥の消長と密接な関係をもっているのは，野生ネコであり，黄尾島および魚釣島におけるアホウドリ，クロアシアホウドリが跡を絶つにいたったことは，明らかに過去における乱獲と野生ネコによる危害が，その主な原因と思われる。

最近の乱獲状況

尖閣列島，とくに南北両小島の海鳥が年をおうて減少していることは前に述べたが，その原因は人為的侵害によるものと思われる。ここに乱獲状況について述べる。

筆者らが尖閣列島の第2次調査 (1952) を行なった際，南小島のなぎさに，カツオドリりの残がいが多数放置されてあった。当時この近海では琉球はもちろん，日本本土や台湾漁船も出漁しており，いずれかの漁夫によって乱獲されたものであることは推察するに難くない。その後筆者らは第4次および第5次調査の際，台湾漁夫による乱獲の事実を目撃した。

1) 1963年5月16日～17日，台湾漁船6隻（15～20トン級），南小島と北小島の間に停泊，乗組員1隻当り8～12名，これらの漁船の甲板には多数の卵かごを積載していた。

2) 1968年7月9日，台湾漁船21隻，主として南小島と北小島の間に停泊，一部魚釣島東北側に停泊，乗組員1隻あたり10名内外，卵かごを積載していた漁船は5隻。

台湾漁夫はいずれも竹のいかだを用いて南小島および北小島に上陸し，卵およびひなを捕獲していた。漁夫の言によると，数日で予定の量を採獲して帰台するようであり，しかもこれを継続的に行なっている。海鳥卵は菓子の原料となり，ひなは焼き鳥の材料として販路は広いといわれる。また卵かごを積載していない漁船の漁夫も，夜間は漁獲に従事し，日中は南北両小島に上陸して卵やひなを採獲していた。なお南小島には，前記漁船のほかに，沈船解体のため，台湾の労務者100余名がテント生活を営んでおり，1968年4月以来，これらの労務者による乱獲が行なわれている。

第4次調査 (1963) の際，南小島の低平地および北小島東南岸の緩傾斜面には，小道が判然としており，これはひん繁に島内を往来していることを証明するものである。また南小島の低平地には野火を放った跡があり，草地やかん木地帯が焼野原に変わっていた。そのため，これらの地域にはセグロアジサシは全く生息していない。

筆者らが，はじめて南小島を訪れた1952年ころは，そこに生息していたカツオドリやセグロアジサシは，人が1mに接近しても容易に逃げなかったが，今日では人を見るなり逃避するものが多い。これも明らかに人間によって乱獲が行なわれている事実を語るものである。

保護に関する所見

1. 海鳥はその群集状況により，漁族の種類，来集および移動の方向を察知し得るので，漁業上きわめて有益である。しかも尖閣列島は海鳥の著名な繁殖地であり，近海は琉球における重要な漁場でもある。

2. 海鳥は産卵数が少なく，その繁殖は低率である。従来狩猟鳥ではないので，鳥獣保護法によって捕獲を禁止されているが，事実は現に人為的侵害を受けている。現状のままに放任するならば，南小島および北小島のカツオドリは著しくその数を減じ，数年を経ずして跡を絶つにいたるであろう。学術研究および資源保護の立場から，海鳥の保護の強化をはからねばならない。

3. 海鳥はその移動，分布する地域は広い範囲にわたるとしても，繁殖地はきわめて限られている。南小島および北小島は天敵も少なく，また食物も豊富であり，海鳥の繁殖地として絶好の場所である。南北両小島を保護区域として指定し，また南北両小島に生息するすべての海鳥を保護の対象とする。

4. 事前に許可を得た場合，または緊急の場合のほかは上陸を禁じ，海鳥およびその卵の採獲はもちろん，海鳥の繁殖を妨害するすべての行為を禁止する。

5. 日本の国土であり，かつ海鳥保護地であることを明示した標柱を設置するとともに，時々巡視船を派遣する必要がある。

摘　　要

1. 本文は尖閣列島の海鳥の生息状況について述べたものである。

2. 尖閣列島における海鳥の分布は，各島によって，その様相を異にする。その起因は各島の地形，地質，地物が海鳥の生息を許容する生態的要因を備えているか，どうかにかかっており，食物は有力な条件にはならない。

3. 従来尖閣列島から知られた海鳥のうち，アホウドリ *Diomedea albatrus*，クロアシアホウドリ *D. nigripes* はすでに跡を絶ち，その他の海鳥も年を経るにつれて激減している。

4. アホウドリ *Diomedea albatrus*，クロアシアホウドリ *D. nigripes* が跡を絶った主な原因は，羽毛採集のための乱獲と野生化したネコによる加害であり，その他の海鳥の激減は，漁夫による最近の乱獲が主な原因と思われる。

5. 尖閣列島は，琉球近海における海鳥の著名な繁殖地であり，学術的ならびに資源保護の立場から早急に保護の方策を講ずる必要がある。

稿を終わるにあたり，本調査に協力下さった方々に深く感謝の意を表する。

参　考　文　献

1) 江崎悌三 1933. "Samarang" の東洋探検. 植物及動物. **1** (3) : 406～410.
2) 羽地朝秀 1650. 中山世鑑.
3) 岩崎卓爾 1918. ひるぎの一葉.
4) ――― 1929. 石垣島の渡り鳥. 台湾博物学会報. **19** (103) : 394～396.
5) 徐　葆光 1721. 中山伝信録（巻一）.
6) 喜舎場永珣 1953. 八重山歴史.
7) 小林實三 1930. 琉球諸島産鳥類並びに鳥卵の採集品について. 鳥, **6** (30) : 341～382.
8) 黒岩　恒 1900. 尖閣列島探検記事. 地学雑誌, **12** (141) : 476～483, 528～543.
9) ――― 1909. 琉球列島の陸棲蛇類, 動物学雑誌, **21** : 84～88.
10) 正木　任 1941. 尖閣列島を探る. 採集と飼育, **3** (4) : 102～111.

11) 宮島幹之助 1900. 沖縄県下無人島探検談. 地学雑誌, **12**(142): 585～596.
12) ―――― 1900. 黄尾島. 地学雑誌, **13**(145～146): 12～18, 79～93.
13) 笹森儀助 1894. 南島探検.
14) 高良鉄夫 1954. 尖閣列島の動物相について. 琉大農学部学術報告, **1**: 57～74.
15) ―――― 1963. 尖閣列島のアホウドリを探る. 南と北, **26**: 63～71.
16) 多和田真淳 1954. 尖閣列島の植物相について. 琉大農学部学術報告, **1**: 75～89.
17) 恒藤規隆 1910. 南日本の富源 (東京, 博文館).

Summary

1. The paper reprots the inhabit of sea-fowls in the Senkaku Islands.

2. Distribution of the sea-fowls is vary in the each island. Topography, geology, and natural feature of the island might be the important factors for the variation. But, food might not.

3. *Diomedea albatrus* and *D. nigripes*, which could be found naturally in the islands before, are not inhabit now. Other sea-fowls are also decreasing sharply year by year.

4. The causes of the disappearance of *D. albatrus* and *D. nigripes* are reckless hunting and violence by cats.

5. The Senkaku Islands are important islands for propagation of the sea-fowls in the Ryukyus. They must be protected for study, and for conservation of natural resources.